

第46回日本神経心理学会, 第56回日本作業療法学会, 法と心理学会第23回大会

言語聴覚学専攻 松尾 加代

第46回日本神経心理学会学術集会

(2022年9月8～9日 於札幌市教育文化会館)

第46回学術集会のテーマは「言語・認知・行為のアルゴリズム」でした。本テーマは私の研究領域である認知心理学と共通するものが多いのではないかと考え、自身の研究領域の裾野を広げる良い機会になるかもしれないという思いで、非会員として初めて集会に参加しました。さまざまな報告を聞く中で、目に見えない認知機能は、障害が起こることで、その機能の存在に気づくことができる、ということを改めて確認しました。また、私の興味は脳機能ではなく、行動として表出される認知機能であるということも再認識しました。集会での発表は、講座やシンポジウムなどの形式で、すべて大ホールで行われました。ポスター発表はなかったため、研究者と個人的に話をしたり、質問をする機会はありませんでした。本集会で印象的だったのは、2日間の12セッション中、タイトルに「初歩」という言葉がついたセッションが6つあったことです。集会全体に「若い世代を育成したい」という空気が漂っており、若手の研究者や臨床家たちが熱心に学ぶ姿を多く目にしました。

第56回日本作業療法学会

(2022年9月16～18日 於国立京都国際会館)

日本作業療法学会では、本学作業療法学専攻の武井麻喜先生の共同研究者として、ポスター発表をしました。アルコール依存症患者49名を対象に質問紙調査を実施し、再入院のリスクとなる要因としてアルコール依存症と診断されてからの経過月数、家族構成（独居または同居者あり）、断酒会への参加をとりあげ、これらの要因が再入院のリスクに及ぼす影響の検討を行いました。その結果、家族構成の影響は有意傾向にとどまり、独居であることが必ずしも再入院のリスクとはならないことが示されました。断酒会への参加の有無と経過月数の要因を合わせて検討したところ、断酒会に参加している人たちと参加していない人たちが、診断後の経過月数が再入院リスクに及ぼす影響が異なることが示されました（図1を参照）。本研究の限界点として、経過月数における外れ値が分析に含まれていたこと、入院回数が6回以上であった参加者6名からは回数の実数値を測定しなかったことが挙げられます。

本学会は規模が非常に大きく、発表会場は9つに分かれていました。会期中のポスター発表は全部で11セッションあり、私たちの発表セッション内だけでも65研究が発表されていました。あまりの発表数の多さに圧倒されましたが、多くの方々が私たちの研究に興味を持ってくださり、絶え間なく発表させていただくこととなりました。

法と心理学会第23回大会

(2022年10月22～23日 於千葉大学)

法と心理学会は毎年参加している学会のひとつですが、今回は3年ぶりに対面による開催となりました。本学会は、法と心理学の学際研究を実現し、司法に関するさまざまな課題（目撃証言、取調べ、裁判、障害者、子ども、被害者など）を検討することを通して、社会貢献を目指しています。大会には研究者だけでなく、弁護士や検察官などの実務家も参加しています。第23回大会では、九州国際大学の石崎千景先生と共同で、「加害者家族に対する社会的な認識の検討」という題目でポスター発表をしました。事件とは無関係である加害者の家族が世間から非難される現象を検討した本研究テーマは比較的新しく、多くの方々に興味を持っていただきました。集まってくださった複数の方々を交えて、そのような現象の理由や研究の方法など、活発な議論が展開され、貴重なご意見を多くいただくことができました。在席責任時間1時間があったという間に過ぎ、時間が足りないほど大盛況な発表となりました。

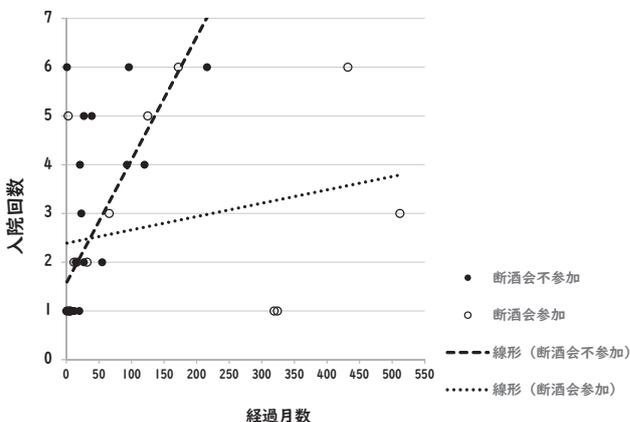


図1 断酒会への参加・不参加におけるアルコール依存症診断後の経過月数が入院回数におよぼす影響